

11月8日、横須賀を母港とする原子力空母レーガンの多数の原子炉操作員らが、麻薬所持によって米海軍から処分されたとの報道を受けて、麻薬中毒者が原子炉を運転しているおそれのある危険な実態に対して、以下のコメントを出しました。

2018年11月8日

原子力空母R・レーガンの原子炉担当者の合成麻薬事件関与についてのコメント

原子力空母母港化の是非を問う住民投票を成功させる会

共同代表 呉 東 正 彦

11月7日付星条旗新聞によれば、原子力空母レーガンの乗組員の合成麻薬LSD不法所持事件で、米海軍の処分を受ける15人の乗組員のうち、14人が原子炉担当部門所属であったとのことである。

いうまでもなく合成麻薬LSDは、幻覚作用をもたらす麻薬であり、14人の原子炉部門担当者が、これを使用していたとするならば、酩酊以上の精神状態で原子炉を運転していたこととなり、原子炉の誤操作や、破壊行為による原子炉事故を招きかねない、原子炉の運転として考えられない危険な事態である。

1995年には原潜ソルトレイクシティで、原子炉当直員が酩酊状態で原子炉を監視していたとのこと艦長が解任されている。

1996年には原潜サンファンで、乗組員が原子炉の制御棒へ電力を供給するワイヤーを切断したという破壊行為によって、免職されている。

そして米海軍は麻薬中毒者を原子炉担当者につけないためのガイドラインも作成している。

従って、米海軍に対して、今回処分されていた原子炉担当者が、原子炉運転監視業務についていたの事実関係と背景、及び全原子炉運転監視員に対する薬物関係に関する徹底的な調査、このような事態が今後決して発生しないための再発防止対策等を、速やかに行い公表することを求めるものである。